

和歌山県有田郡吉備町

**野田・藤並地区遺跡発掘調査概報 II**

昭和57年3月

和歌山県教育委員会

## 例 言

1. 本書は、和歌山県が日本道路公団より委託を受け、有田郡吉備町において実施した昭和56年度野田・藤並地区遺跡発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査組織は下記のとおりで、和歌山県教育委員会の指導のもとに社団法人和歌山県文化財研究会が発掘調査を実施し、野田・藤並地区遺跡発掘調査委員会委員の指導をうけ、藤井保夫が担当した。
1. 発掘調査に際し調査委員のほか、岡山大学助教授福田孝司氏、同志社大学講師松藤和人氏の指導を得た。また、出土遺物については、岡本東三・柳田俊雄・佐藤良二・中原正光・中村貞史・松下 彰各氏より、地質については吉松敏隆氏らに種々御教示いただいた。
1. 本概報は、和歌山県教育委員会文化財課職員・社団法人和歌山県文化財研究会技術員諸氏の協力を得て、藤井が作成した。

## 調査組織

### 野田・藤並地区遺跡発掘調査委員会

調査委員	調査員
鶴磨 正信 和歌山県文化財保護審議会委員	藤井 保夫 和歌山県文化財課技師
巽 三郎	武内 雅人 和歌山県文化財研究会技術員
都出比呂志	富加見泰彦
藤沢 一夫	渋谷 高秀
亀井 利行 吉備町文化財保護審議会委員長	土井 孝之
岩上 豊顯 吉備町教育長	
畠村 半亮 和歌山県文化財課長	
事務局長 海野 正幸 和歌山県文化財研究会事務局長	
△ 次長 梅村 善行 和歌山県文化財課課長補佐	
△ 幹事 桃野 真晃	第2係長

## 第1章 調査 経緯

1. 調査に至る経過 和歌山県教育委員会は、日本道路公団が推める近畿自動車道和歌山線紀南延伸構想とともに、「海南湯浅道路」建設に先立ち、昭和50年2月～3月にかけて有田郡吉備町野田地区における発掘調査のあと、昭和55年度事業として、おもに吉備町野田地区において、有田川左岸の段丘面及び范瀬原における発掘調査を実施したところ、旧石器時代から室町時代にかけてのおびただしい遺構を検出し、多大の成果を得た。また、同時に発掘調査を実施した同藤並地区では平安時代の溝のほか旧石器時代から縄文時代草創期あるいは早期にかけての石器類が後世の擾乱層より出土していた。

昭和56年度発掘調査は、藤並地区における旧石器時代から縄文時代草創期にかけての石器出土層位の確認あるいは遺構調査などに調査の主眼をおき、同年4月より56年度事業に着手したものである。

2. 調査日誌(抄) 昭和57年4月～5月にかけて、藤並地区を中心とする発掘調査準備に着手し、同6月2日より、藤並第1・4区の調査に着手する。同日、第1区ではかつての耕地開発により水平層となっている土を除去したところ、旧石器ないし縄文時代草創期のものとみられる石器剝片を検出する。6月4日、第1区北半において、小河川の自然流路とみられる砂層を検出、6月9日、第1区南半で平安時代～中世にかけての土壇の精査。北半では小河川自然流路・南半では黄色シルト質土に穿たれた平安～中世にかけての土壇のほか、石器片が出土する不整形な土壇群の存在が明らかとなる。

第1区調査と並行して6月19日より第4区の調査に着手、いわゆる石器時代の遺構、遺物、土層の確認を行うが遺構・遺物の出土層が明確に出来なかったため7月25日、調査区に3m巾のトレーナーを設定し、さらに下層の土層状況を調査するが、粘質土層、砂層、砂礫層、炭層、植物遺体層などを確認したが、いずれも石器類は含まれておらず、石器時代の文化面はすでに削平されたものと判断された。

第1区調査区では石器類などを含む自然流路が幾条にも検出されたため、サブトレーナーを設定しその前後関係を明らかにし、6月24日からは、土壇群の調査を並行して行う。8月19日以降、石器類を含む堆積関係を明らかにするため、下層流路の調査を実施し9月18日各地積層などのサンプルを採集し調査を終了した。

昨年度調査予定地であった野田地区遺跡第8区のトレーナー調査を9月1日より実施する。天満川旧堤防および范瀬原を検出したが、その他の遺構・遺物は検出されなかった。

10月12日より、6区、昭和57年1月22日より2月8日にかけて6-2・7-1～3区のトレーナー調査を実施したが、顕著な遺構・遺物の検出にはいたらなかった。その後、第5区とした丘陵部の踏査や工事施工に伴い立ち会い調査を実施するが果樹園としてすでに地形の変更がいちじるしく遺構・遺物は認められなかった。

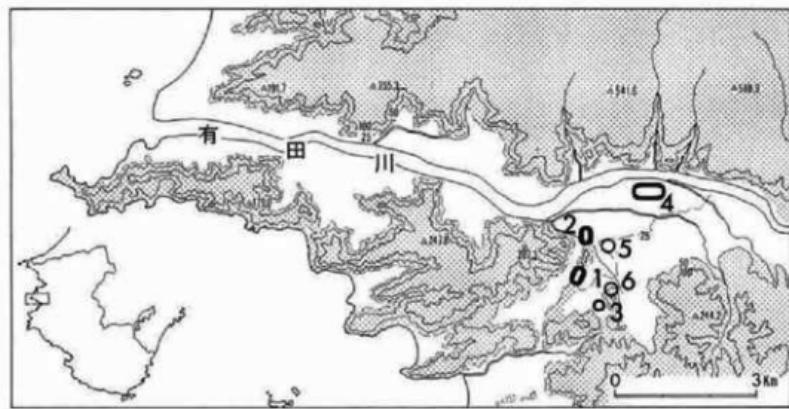
## 第2章 位置と環境

藤並地区遺跡は、有田郡吉備町明王寺100番地、同天満142番地ほかに（図版第1・挿図1・2）あり、国鉄紀勢線藤並駅の東方約200メートルの平野部に所在する。北側の神楽山と南側の小丘間に挟まれた南北約200メートルにわたって、旧石器時代から平安時代の遺構が検出されたが、その東西幅は明確でない。同所は、いわゆる有田みかんの主要生産地の一つで、早くより水田から果樹園へと耕地の変遷があるが水田面の標高は約18.6メートルを計り、遺構検出面は約17.7メートルを計測する。

有田川河口より上流へ約10~15キロメートルにかけて、有田川南岸に広がるいわゆる吉備平野の西端部に位置する。この吉備平野は、三波川変成帯とよばれる結晶変岩からなる長嶺山脈の南麓を西流する有田川が、南部の主に中世代の地層からなる三本松峰山の比較的緩斜傾地の北斜面を浸食してきた段丘面や、堆積作用による沖積平野から形成されている。藤並地区遺跡の所在する吉備平野の西端部は、有田川河口の南部で紀伊水道に没している古世代の地層からなる雲雀山地の東端部でもあり、三本松峰山地との断層谷の可能性がある地点で、非常に複雑な地形を呈する。雲雀山地西南部から集まる自然水の溜り場的な地形を示すため、いわゆる吉備平野の中位の第4段丘の高さ内にありながら、盆地状の湿地に近い条件下に営まれた遺跡である。このためいわゆる地山は、植物遺体の堆積層、シルト質土層や雲雀山地から流入した角礫層、又は、三本松峰山地北麓部にみられる水晶などを含む砂層などの互層からなっている。<sup>(注1)</sup>

周辺遺跡（挿図1-2~6）については、南東約1km地点の丘陵斜面に石器類が散布する土生池遺跡があり、旧石器時代から縄文草創期のナイフ形石器・有舌尖頭器・石鏟・スクレイパーなど

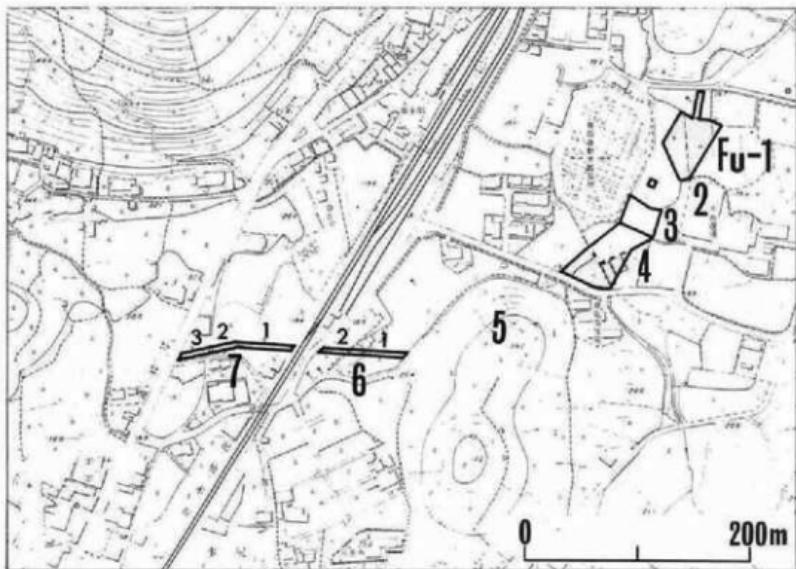
挿図1 位置図



- 1 藤並地区遺跡 2 野田地区遺跡 3 土生池遺跡 4 尾中遺跡 5 天満古墳群  
6 土生池古窯址群

どがみられ、藤並地区遺跡とほぼ並行する時期である。神楽山をはさんだ北方約1kmの野田地区遺跡は、低位段丘に13世紀代の遺構、有田川旧氾濫原に掘鑿された溝状遺構のほか、段丘から遺物が旧氾濫原へ多量に落ち込んでいる状態が把握された遺跡である。遺物の中には、縦長剥片の石核のほか、縄文後期の土器片・弥生後期から古墳時代中期にいたる土器、木製品など、また、奈良時代・平安時代・鎌倉・室町期の木製品、土器もおびただしいものである。また、吉備平野の沖積部微高地に営まれた、尾中遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡で、集落をめぐる環濠とみられる溝の一部や、円形から方形への平面プラン変遷を示す住居址などが検出された。また、周辺からは奈良時代の須恵器なども検出されている。<sup>(注4)</sup>一方、中位段丘上には、天満所在の藤並神社境内に、古墳時代後期の横穴式石室を主体部とする天満一号墳など数基の古墳がみられる。段丘上の奈良時代遺跡は明確ではないが、南部の丘陵麓には、土生古窯址群があり、奈良時代須恵器生産のほか、七葉複弁蓮華文軒丸瓦など白鳳期瓦窯の存在も報告されており、有田川北岸の田口所在の田殿庵寺への供給品であったかも知れない。このほか、各時代の単独出土遺物を挙げるまでもなく、原始・古代・中世にあっては、有田川流域の先進地域として、また、有田郡の中心地域として早くから開けた地域である。

挿図2 藤並地区遺跡調査地点



### 第3章 調査の概要

藤並地区遺跡では第1・4区を中心に発掘調査を実施した。第1区では、水田面下 約60 cmの標高約17.7メートルで黄褐色シルト質土の地山面で、旧石器時代から縄文時代草創期にかけて小河川の自然流路ならびに、自然流路の西部に同時期とみられる土堆群を検出した。遺構検出面より上層は、水田耕作などによる水平擾乱層であったため、本来のベースは削平を受けていると考えるべきで、黄褐色シルト質土の検出面での石器類の出土はみられず、また、シルト質土そのものに石器等は含まれていない。同シルト質土の下層には暗黃褐色粘質土、黄色砂層、砂礫層、青灰色粘質土層などが堆積しているが、やはり、石器類は包含されない。なお、土堆群が認められた地点には、青灰色粘質土を覆土とし、瓦器塊などを含む土堆・ピットなどが検出された（図版第3）。

第4区 第1区と同様に、標高約17.7メートルで検出された黄褐色シルト質の上部に堆積していた水平土層である暗褐色土には瓦器片のほかナイフ形石器や有舌ポイント・石鏃などを含んでいたため、遺構、遺物の有無・土層などについて調査を実施したが、黄褐色シルト質土、およびその下層の灰白色粘質土、灰色粘土、灰色砂質土、灰色砂礫層、さらにその下層の炭層を含む灰色粘土・植物遺体層などの互層にも遺構遺物は検出されなかった。

なお、2・3区は前年度調査のとおりである。国鉄紀勢線を挟む、6・7区については巾3メートルのトレンチ調査（挿図3）を実施したが、果樹園になる以前の水田遺構や近現代の陶磁器のほか、後世の流入土とみられる灰色粘土層から、いちじるしく磨耗した瓦器細片を少量検出したが、これにと

挿図3

FU-6・7区調査状況



1. 6区調査状況



2. 7区調査状況

もなう時期の遺構は検出されなかった。

野田地区遺跡第8区では天満川の旧堤防の一部を検出したが、その他の遺構遺物はみられなかった。

以下、藤並地区の中でも、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての小河川の自然流路を含め、土塙群が検出された第1区について、その概要を説明する。

## 第4章 遺 構

(図版第2~第5・第1図)

1. 小河川の自然流路 旧地形については、第2・3章での層序説明でふれたごとく、湿地状の環境のもと、黄褐色シルト質土・砂層・植物遺体層ほかが堆積したこの盆地状地形は、現在の遺構等の検出面よりやや高かったものと考えられ、旧石器時代では盆地状地形の北部を小河川が侵蝕、堆積をくりかえし、北ないし北西方向へ流れていったものとみられる。検出面では、巾35メートルにわたり少くとも10条以上の流路が確認されたが、それらは流路の方向性や底のレベルから大きくは新旧2時期にわけられるものとみられ、旧流路群については、流路規模などがとらえられる時期とそれ以前に堆積した時期に大別できるものとみられる。これらの自然流路の規模は当然のことながら不定で、巾約2~7メートル、深さ0.2~0.9を計測するもので、新しい時期の流路(SX-01~04)は総じて暗褐色砂質土系統が堆積し、旧流路のうち流路の確認できるグループは(SX-05~10)は総じて青灰色砂質土系統が堆積し、それ以前の堆積土は黄灰色砂質土系統で浅く、むしろ(SX-05~10)により下刻されている。いまかりにこれらを古い順からⅠ期~Ⅲ期とした時、Ⅰ期には石器類が含まれず、Ⅱ期で石器が含まれるようになり、Ⅲ期の流路では最も多くの石器類のほか縄文土器片が含まれる。

2. 土塙 小河川の自然流路の南西方で検出した土塙は、長さ8メートル、最大巾2.2メートルを計るSK-03のほか、長径約1.4~4.2、短径約1.0~3.1メートル、深さ0.1~0.5メートルを計る楕円形土塙など10基を検出した。いずれも、暗茶色・黒褐色などの強粘質土を覆土とし、小河川の堆積とは、明らかにその経緯を異にしている。土塙内には、底や壁に密着した状態で、ハンマー、ナイフ形石器、スクレイパー、石鎌などのほか、多数の剥片がみられた。これら土塙のうち、大型の4基の土塙では石器製作時の作業台かとみられる硬質砂岩の河原石などを土塙底に据えており、接合資料を得たものもある(図版第5・6)。また、相接していたSK-04・SK-05出土の剥片には、それぞれ同一原石とみられる剥片や、接合する剥片が認められる点から、本来は同一土塙であった可能性も残る。これらの土塙底からは石器、およびその未成品・剥片・チップが多数検出されている。こうした状況や生活面を考え合せた場合、これら土塙群は原土塙のうち石器製作個所であったろう、もっとも深い部分にあたるものではないだろうか。なお、SK-07の土塙覆土中より土器細片が検出されている。

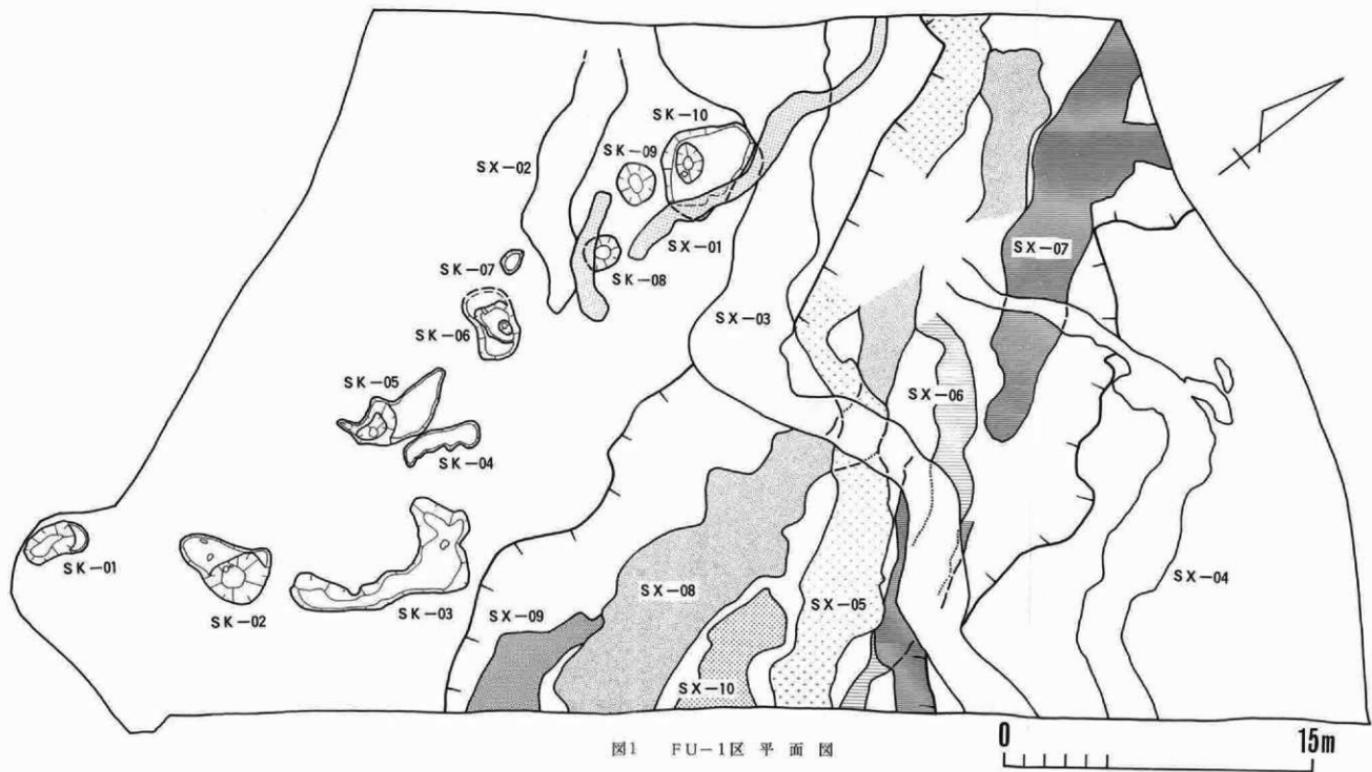


図1 FU-1区 平面図

さて、自然流路と土塙群の関連を整理するとおよそ次のようになるだろう。自然流路の北西方に検出された土塙群の分布は、I・II期の流路方向とほぼ一致しており、III期の自然流路S-X-02~04はその方向性から、大きな範囲での一流路に包括でき土塙群と重複関係が考えられる。そして、I期の流路には石器類が認められず、II期の流路になってはじめて石器が含まれることなどから、これらの土塙群はII期の流路が形成された時期のものと考えられよう。なお、III期の流路堆積土中に含まれる多量の石器類を中心とする遺物は、これらの土塙群以外の要因によって、つまり、今次の調査では確認されなかったが、III期の自然流路の時期にも石器時代人の生活がこの周辺に展開されていたことを示すものであろう。

## 第5章 遺 物

(図版第6~12)

石器・サスカイトのほか、頁岩系統の原石を用いたナイフ形石器・スクレイパー・石鏃などのほかに、砂岩等を用いたハンマー類など多様である。自然流路4出土の国府型ナイフ形石器(図版第9-1左)は、長さ7.05センチメートル、幅2.3センチメートルを測る。国府型ナイフ形石器と同様に横長の剥片を利用したナイフ形石器(図版第9-1中右)はいずれもサスカイトを用いているが、小型で不定形なものが多く、基部を中心に刃部にタッチを加えるものもある。縦剥の剥片に限られる頁岩系統の石を用いたナイフ形石器(図版第9-2中左)は、長さ5センチメートル前後のものが多い。

スクレイパーはごく稀に頁岩質の不定形剥片を用いたものがあるが、そのほとんどが、サスカイトの剥片を用いたスクレイパー、ラウンドスクレイパー(図版第10-2)で、前者は定形化したものはない。また、刃器として利用したとみられる、長さ6.4センチメートル、巾2.9センチメートルを計り、使用痕を残す縦長剥片(図版第10-1)や、握り拳よりやや小さめの河原礫を用いた片刃の粗製石器などがみられる。

ハンマーは粘盤岩質の河原礫や硬質砂岩の河原礫を用いたものと、軟質の砂岩河原礫のものがあり粘盤岩質河原礫のハンマー(図版第11-2)は両端部に打痕がみとめられ、パンチとしての利用もあったものとみられる。

石鏃のほとんどは小河川の自然流路堆積土中より出土したもので、石英質の石材を用い入念な剝離技法で鏃頭状の縁辺をもつ鏃形石鏃以外はいずれもサスカイト製のもので、有舌尖頭器の小型様の形状を示す有茎石鏃・木葉状を呈するもの、五角形石鏃・錐形石鏃などが出土している(図版第12-1)。平扁な結晶片岩の河原石を用いた特殊な石器(図版第11-1)は短片の両端を欠失しているが、現存長9.0センチメートルを計るその長辺の一辺には、両側からの、弧状の断面をもつ溝状擦痕がみとめられ、あたかも矢柄研磨器の断片のようであるが、断定しかねる。

土器 石英や結晶片岩の砂粒を含む厚さ4~5.5mmを計る薄手の土器細片で、磨耗がいちじるし

いが器肉は暗褐色で比較的よく焼きしまっている(図版第12—2)。器表は明るい褐色を呈し文様はみられない。自然流路SX-04の堆積中・土塚SK-07より出土した。

以上のように土塚群・自然流路出土遺物には、国府型ナイフ形石器から縄文時代草創期あるいは早期にかけての土器、石器類が多量に見られた。しかし、国府型ナイフ形石器の出土を見た自然流路SX-04では同時に有茎石錐や土器片などが混存しており、プライマリーな国府期の石器文化を確認することはできず、その多くは、国府期以降から縄文時代草創期ないし早期にかけての遺物であった。なお、これら第1区出土の石器類には、細石刃、有舌尖頭器が含まれていなが、第4区では有舌尖頭器が出土していることも付記しておかねばならない。

## 第6章 小 結

第4章でもふれたごとく、小河川の自然流路の西南方に検出された土塚群の性格については、その土塚底における、作業台・ハンマー・未製品・剥片・チップの存在は明らかに石器を製作した個所であることを示すものであるとともに、ナイフ形石器やスクレイパーなどの存在は石器製作以外の生活空間であったことをもの語る。それは土塚(SK-05)などから出土した出土の石錐から、水を求めて小河川へ集まる小動物などを狩猟するために河畔に設営したであろう、キャンプサイトと考えられる。しかしながら火を使用したような炉状遺構などの検出にはいたらなかった。なお、これらの土塚は、Ⅱ期の自然流路の岸辺に沿って南北方向に並列しているようであるが、ナイフ形石器をもつ土塚(SK-07)や石錐をもつ土塚(SK-05)など時間差が認められるようであり、また、Ⅲ期の自然流路に含まれている極めて多量の石器・剥片から、この周辺では、長期にわたるかなり大規模なキャンプサイトであったことがうかがえる。第2章で紹介した土生池遺跡は本遺跡とほぼ同時期の遺跡で、約1キロメートルと距離的には非常に近い位置にありながら、いわば南向きの丘陵斜面に立地し、本遺跡とは水量の多寡など決定的な自然条件の相違をみせる土生池遺跡の調査が望まれる。

出土遺跡の問題点は多岐にわたるものと考えられるが、ここでは国府型ナイフ形石器、有舌石錐について若干の問題点を指摘しよう。

県下のナイフ形石器は、「国府系統のナイフ形石器」とするサスカイトの横長剥片を素材としたナイフ形石器が紀ノ川流域から有田川流域では土生池遺跡・徳田遺跡で確認されており、紀ノ川流域にあっては、盤状石核から剥離した翼状剥片を素材とした国府型ナイフが打田町堂坂遺跡・貴志川町平池西方遺跡で確認されていたが、本遺跡出土例は、瀬戸内技法による製作工程を示す資料が得られなかったものの典型的な国府型ナイフ形石器であるため、国府文化の南限を語り得る資料が得られた。頁岩や粘盤岩を用いた縱長剥片を利用したナイフ形石器は、いわゆる淀川

回廊地域などで類別の多いもので、その素材となるべき剝片が長さ5.0センチメートル前後のものに限られ大剝離面の縁辺を刃部として利用する計画性を有するものである。この種のナイフ形石器の素材をみちびき出す剝離技法とSK-02で検出した接合資料などにみる縦長比の小さい剝離技法との関連は現在のところ不明であるが、前者にはサヌカイト製ナイフ形石器は含まれていない。これがナイフ形石器文化の地域差あるいは時期差によるものか、また、これに関連する縦長剝片の技法との前後関係、あるいは同時期における使途目的別の技法であるのかなど今後の資料整理に期するところである。

次に有茎石鎌は出土点数、15点中7点の約50%を占め（その他の形態の石鎌との前後関係を明らかにすべきであるが）、有舌尖頭器を縮小したような一定の形態をもったもので、長さ2.25～2.7cm、最も大きいものとみられるものでもその復原長は3cmを越えないものである。各地で出土している小型の有舌尖頭器の使途については多くの問題を含んでいるが、弓矢としてこれら一群の有舌尖頭器形の石鎌が、ある一時期狩猟生活に大きな比重を占めたことを如実に示すものである。弓矢の出現と有舌尖頭器型あるいはその他の尖頭器との関係を明らかにしていくうえで重要な資料といえ、今後の研究課題としたい。

註1 吉松敏隆「地形・地質」『吉備町誌上巻 第一編自然』所収 昭和55年

註2 中原正光「土生池遺跡・徳田遺跡」『吉備町誌上巻 第二編考古』所収 昭和55年

註3 和歌山県教育委員会・社団法人和歌山県文化財研究会「野田・藤並地区遺跡発掘調査概報」昭和56年

註4 田中重雄「尾中遺跡」 註2に同じ

註5 田中重雄「土生古窯跡出土古瓦」 註2に同じ

註6 註2および、中原正光「先土器時代の遺跡と遺物」『和歌山の研究1』所収 昭和54年

註7 註2に同じ

註8 福磨正信ほか「堂坂遺跡」『打田町史史料編1』所収 昭和55年

註9 福磨正信・岩鶴敏治「平池西方遺跡」『貴志川町史誌史料編2』所収 昭和56年

①



1. 土生附近から遠景（東→西）

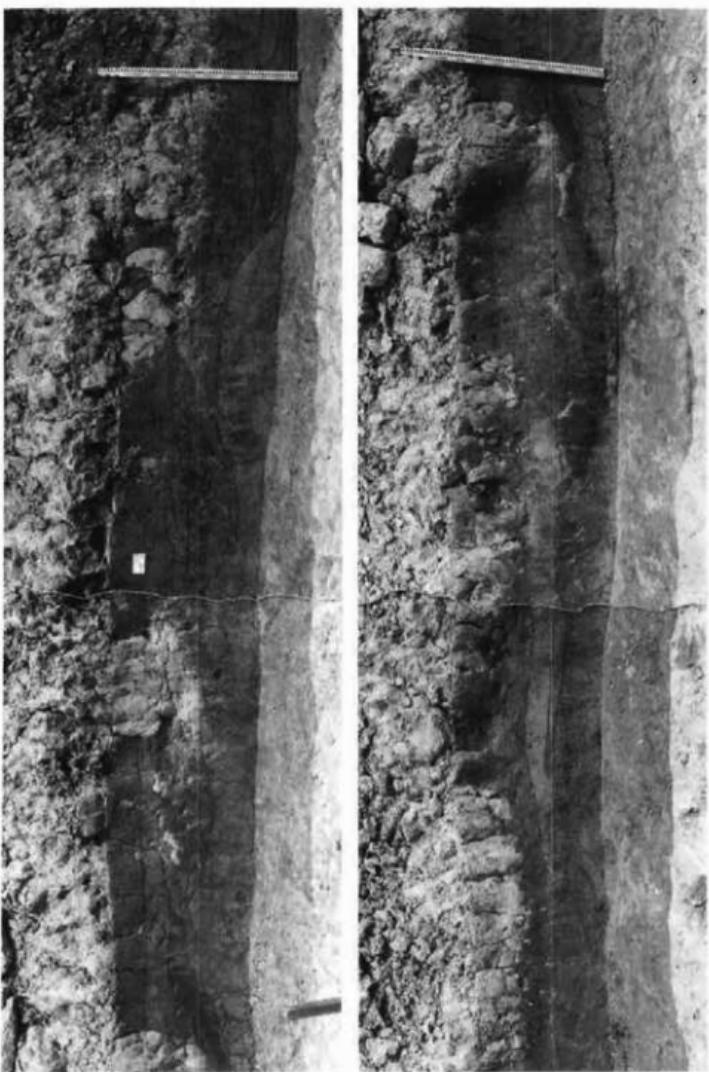


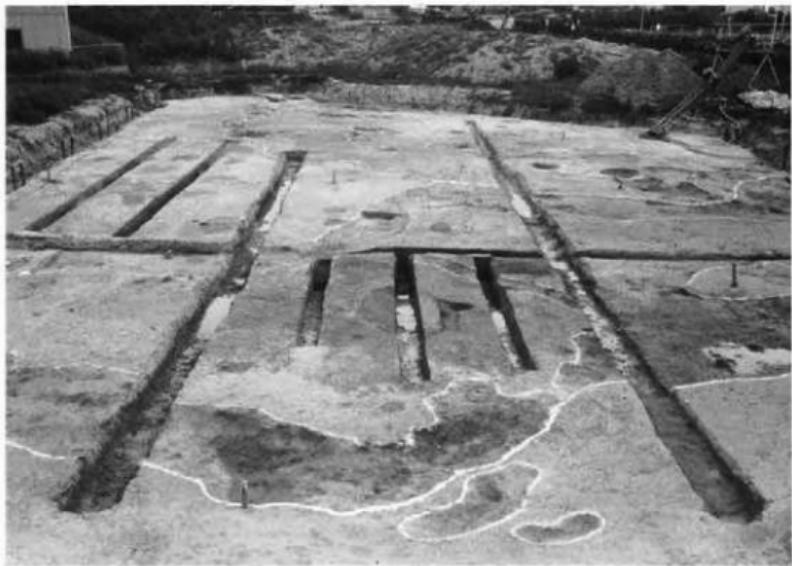
2. 4区から1区遠景（南→北）

図版第二 FU第一区 全景（航空写真）



図版第三 FU第一区 調査区東壁土層





1. 上部自然流路(Ⅲ期)



2. 下部自然流路(Ⅱ期)



1. 土坡 (SK-02)



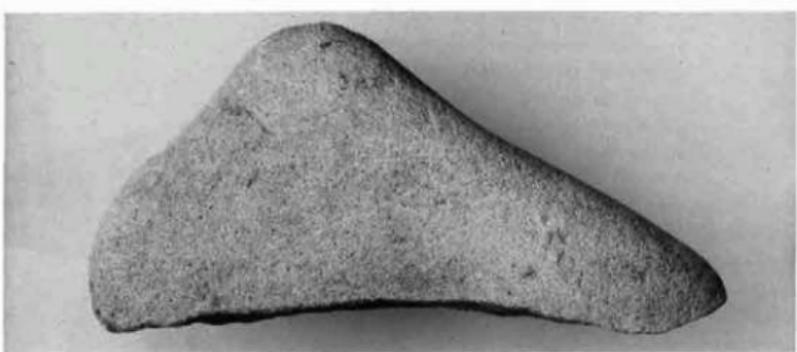
2. 土坡 (SK-03)



1. 接合資料

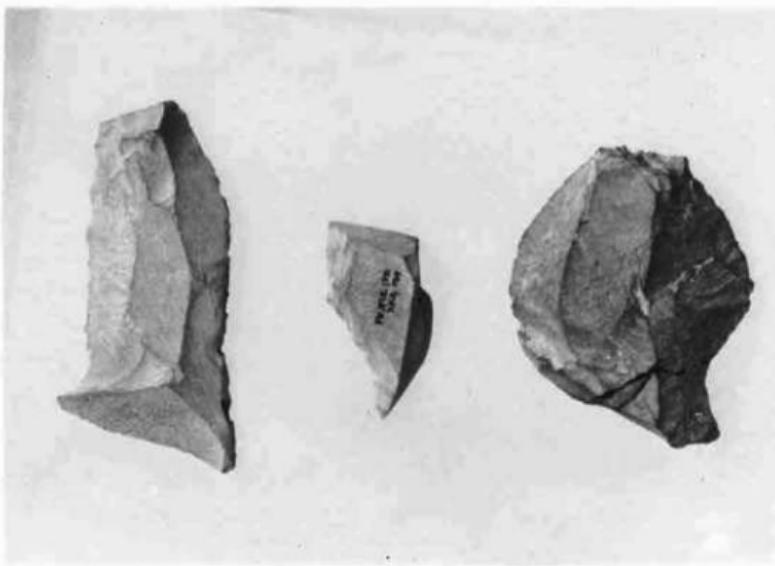


X



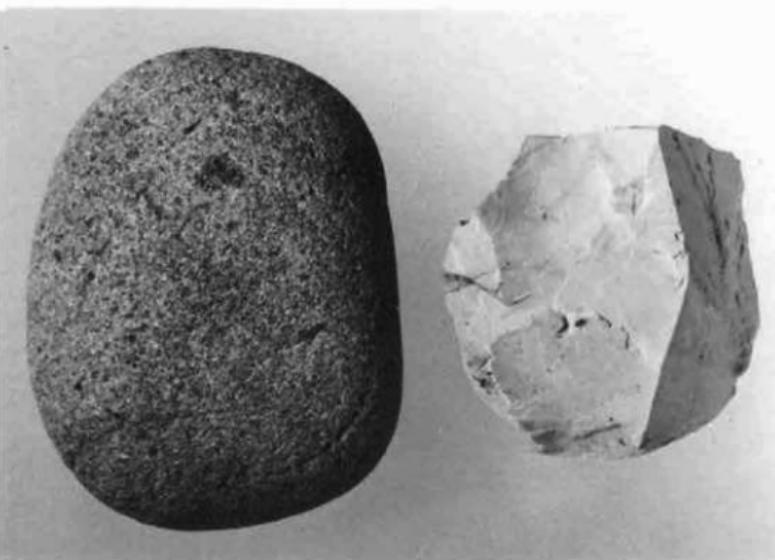
2. 硬質砂岩河原石

X



1. スクレイバー

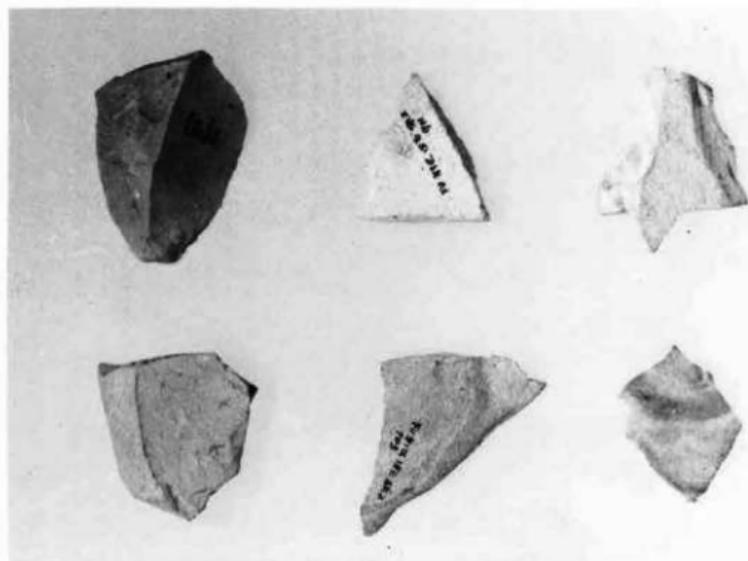
X



2. ハンマーストーンと石核

X

圖版第八 FU第一区 土塙(SK-03) 出土遺物二



1. 骨片

X



2. 骨片とチップ

X



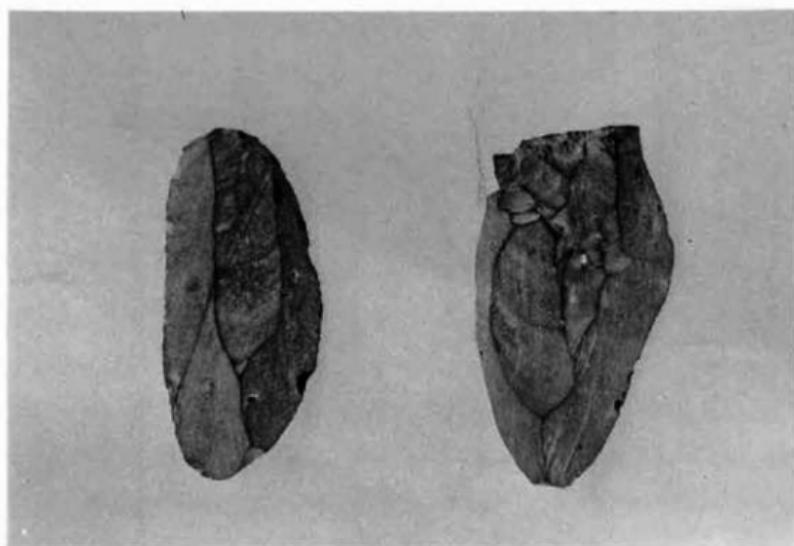
1. ナイフ形石器（横剥）

X



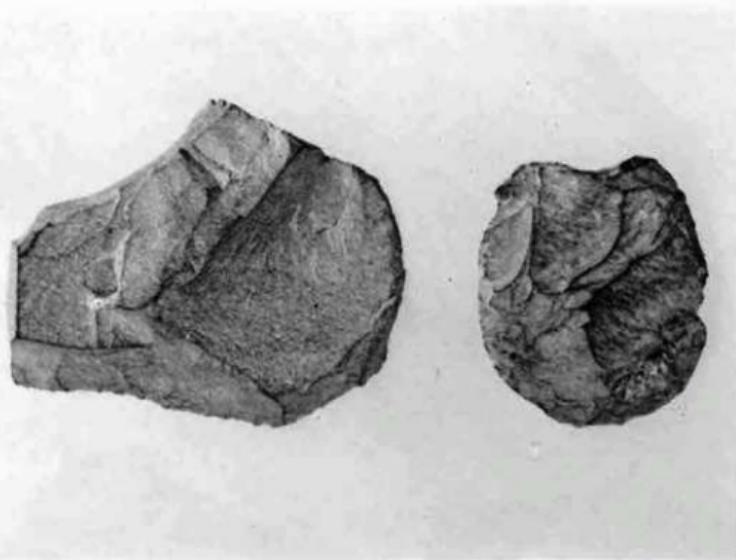
2. ナイフ形石器（縱剥）

X



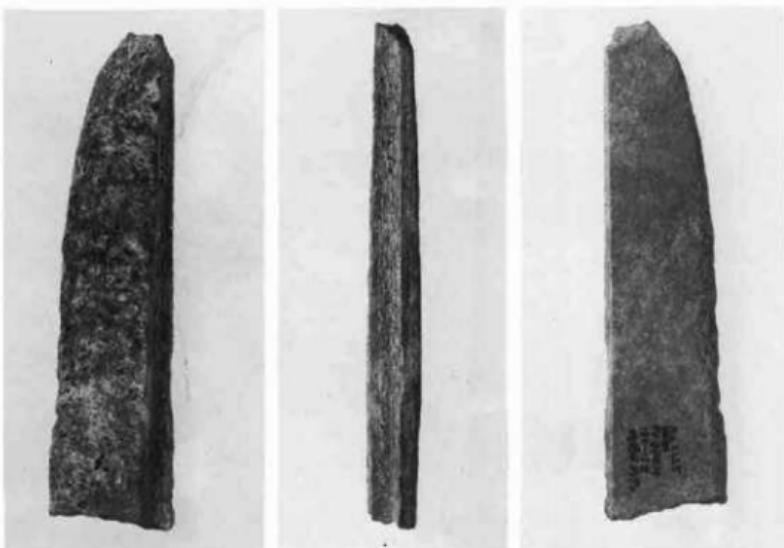
1. 縦長削片

X



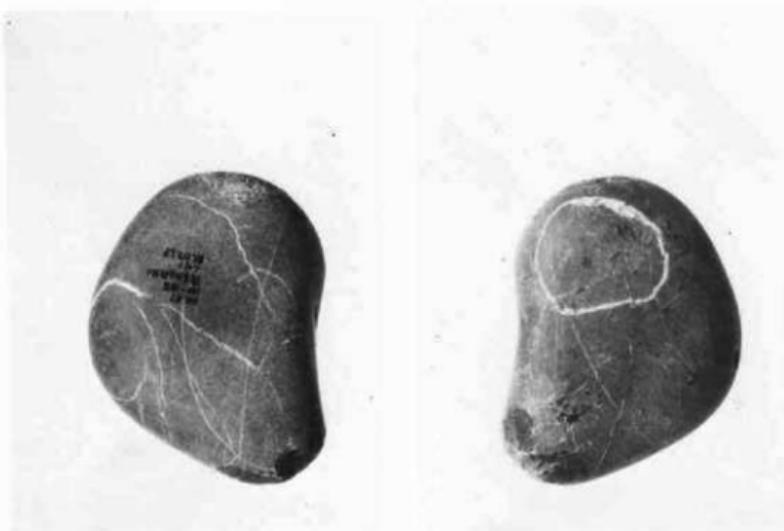
2. スクレイパー

X



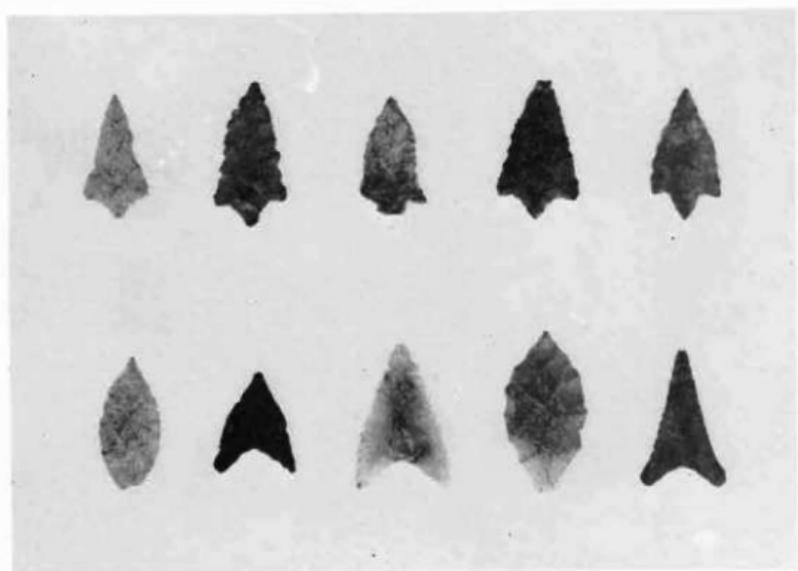
1. 矢柄研磨器?

X



2. ハンマー(パンチ)

X



1. 石 箭

X



2. 繩文土器片

X

野田・藤並地区遺跡発掘調査概報 II

昭和57年3月31日 印刷・発行

編集・発行 和歌山県教育委員会文化財課

印 刷 邦 上 印 刷